産業都市委員会　行政調査報告書

１　調査期間

平成２４年１０月２日（火）から１０月４日（木）まで

２　調査先及び調査概要

（１）石川県加賀市（１０月２日）

「観光振興施策について」

北陸新幹線金沢開業を機に、観光客３００万人の誘致に向けた、「加賀ブランド」の確立、（仮称）クール・加賀３００万人構想などの観光振興策の調査・研究。

（２）石川県金沢市（１０月３日）

「産業振興施策・観光振興施策について」

ものづくりのまちとしての伝統と誇りを継承・発展させることを目的とした「ものづくり基本条例」及び、「きらりと光る金沢のもてなし力の向上」などを掲げた観光戦略の調査・研究。

（３）富山県富山市（１０月４日）

「まちづくり施策について」

公共交通機関沿線に都市機能を集積させ、拠点集中型のコンパクトなまちづくりを目指す「コンパクトシティ構想」及び、市内を流れる運河において推進している「船の運航による魅力づくり」や水辺を活かした魅力あるまちづくりの調査・研究。

３　参加委員

委員長	樋　口　敏　郎
副委員長	じんの　博　義
委　員	中　沢　えみり
委　員	高　橋　正　利
委　員	しもむら　　緑
委　員	細　田　一　夫
委　員	坂　下　　修
委　員	西　　恭三郎

４　同行幹部職員

産業観光部長　　高　野　祐　次

５　調査概要

別紙のとおり

調査概要　【加賀市】

１　市の概要

加賀市は、石川県の最南端に位置し、北に日本海、東に白山を仰ぎ、南には大日山をはじめとする自然豊かな山々が連なる、面積３０６．００平方キロメートル、人口約７万２千人の都市である。

市の伝統産業である九谷焼や山中・山代・片山津の三つの温泉からなる加賀温泉郷など、観光都市として全国に名が知られている。

藩政期に加賀藩より分かれて、現在の加賀市と小松市の一部を治める大聖寺藩が誕生し、以来明治維新まで１０万石の城下町として栄え、産業や文化、生活基盤など今日の礎が築かれた。

維新後、大聖寺県、金沢県を経て石川県江沼郡となり、昭和３３年、９町村が合併し加賀市となる。平成１７年に山中町と合併し、現在の加賀市となる。

平成２６年度末の北陸新幹線金沢開業を見据え、観光誘客３００万人を目指す「クール加賀３００万人構想」を策定し、日本全国、近隣アジアからの誘客促進を図るため、加賀ブランドの推進、地域ぐるみの魅力づくりと賑わい創出に取り組んでいる。

（参考／地方公共団体総覧ほか）

２　調査事項

「観光振興施策」について

加賀市は、北陸新幹線金沢開業を機に、観光客３００万人の誘致に向けて、個性と文化を感じる街並みや伝統工芸品等の優れた資源を「加賀ブランド」として確立し、その魅力を観光宣伝の素材として誘客を図るとともに、街並み整備などによる地域の魅力づくりを進めている。

（１）観光振興重点施策の方針

ア　首都圏を中心とした情報発信の強化

・加賀温泉郷誘客促進事業

・首都圏誘客宣伝事業　ほか

イ　加賀温泉郷の魅力向上

・観光フィールド大学開催事業

・地域連携おもてなしイベントの開催

・ニューツーリズムによる滞在型慣行の推進

ウ　広域連携による観光誘客の推進

エ　加賀のブランド化推進

（２）（仮称）クール・加賀３００万人構想

ア　審議会の設置

有識者、旅行業者、メディア関係者等から成る、本構想策定のための審議会を設置。

イ　基本目標

・魅力ある地域資源による「加賀ブランド化」

・超「温泉」地域　ビジネスモデルの構築

・広域連携と街道交流による誘客促進強化

・北陸新幹線金沢暫定開業に向けた観光プロモーションの強化

・観光二次交通による利便性の確保と回遊性の向上

3　主な質疑応答等

Q：「加賀」という名前を売り出していくという話をされていたが、例えば、市役所の最寄駅である「大聖寺駅」を「加賀駅」にしようという動きはないのか。

A：市内にある３つの駅名を決めるときに、「加賀温泉駅」という名称を付けたが、「大聖寺駅」については、当時はそういう発想はなかった。今の市長は、全ての言葉に「加賀」というブランドを付けていこうということでやっているが、「加賀大聖寺駅」ということまでは言っていない。昔は、ここは大聖寺藩で、加賀という地名はなかった。昭和の大合併で市の名前を決めるときに、「加賀百万石」の「加賀」を、金沢市が付ける前に本市が先に付けた。

Q：東京で「加賀」というと、やはり「金沢」というイメージだ。「金沢」はかなり認知度が高い。地図を見ると、ここの大聖寺駅は市の中心から離れている。やはり中心は「加賀温泉駅」の辺りで、そこからいろいろなことを発信していくということになるのであろう。

A：「加賀温泉駅」は特急が停まる中心駅で、「片山津」「山代」「山中」の各温泉から距離的にもちょうどいい場所である。

Q：外国人の宿泊客についてであるが、なぜ台湾からの宿泊客が多くなっているのか。姉妹都市になっているとか、どこかと提携しているとか、市から何らかのアプローチをしているのか。

A：特に何かをしているわけではない。八田与一という金沢出身の人がいるが、台湾でダムを造って治水をして、今でも台湾の国民から感謝されているので、そういう影響もあるのかもしれない。また、県と台湾とで交流をしているので、金沢に行くときに加賀に泊まる、ということもあるのではないか。

Q：若年層が就職等で県外に行ってしまうということがあると思うが、そういうことから、観光とつなげて、市内で就職を促すような施策を検討したことはあるか。

A：バブルの頃は旅館等が全盛期だったので、働いている人も若い人が多かった。今、その人たちが高齢となって仕事もないということで、生活保護に移行する人が増え、加賀市は県内で２番目に生活保護受給者が多い。

　現在は、既存の旅館等で働いている若い人は少ないが、外資系の企業が進出してきたこともあり、そういうところでは若い人の雇用も増えている。

Q：ＪＲの駅に、情報を一元化した無休の「観光案内所」を設けたということだが、利用客等は相当増えたのか。

A：情報を一元化するということで、観光情報の発信だけではなく、お客様と接して意見を聞きながら、そこで企画商品を作るとともに、その運営も行った。観光案内の問い合わせや旅館のあっせんなど、全て観光案内所で対応することで利用客は増えた。最近は、宿泊客の減少とともに利用者も減ってきている。

Q：女性による観光ＰＲチーム「レディ加賀」は誰が発想したのか。ユーチューブでアクセス数がすごく多いということだが、それによって集客力が上がったのか。また、レディ・ガガ本人に対しては何らかのアクションを起こしているのか。

A：「レディ加賀」は、山代温泉にある旅館の若手の専務の発案である。金沢の広告代理店と協力してつくった。「レディ加賀」は、観光庁長官表彰を受けたので、観光庁長官を通じてレディ・ガガ本人に手紙を出そうかという意見もあったが、結果的には出さなかった。レディ・ガガの音楽を使うことについては、著作権の問題もあるので、広告代理店を通じて相手側の権利を持っているところときちんと話をつけている。

　効果については、今のところ「レディ加賀」に会うためにお客さんが来るということはないが、来たお客さんから、「どこに行けば会えるのか」という問い合わせは結構ある。どちら

かというと、誘客というよりも満足度という面、地域の回遊性を高めるという面で貢献していただいている。人を呼ぶというよりも、まず加賀を知ってもらうということからはじめている。

Ｑ：旅行会社のツアーなどでは、金沢は能登との組み合わせが多いが、加賀は福井県の東尋坊だとか永平寺とかとセットになっている。金沢は関東からの観光客が多いが、加賀は関東よりも関西からのお客さんが多いのではないか。

Ａ：金沢・能登は関東圏からの観光客に強みがある。加賀は関西圏からのお客さんが多い。北陸新幹線金沢が開通すると東京から金沢まで２時間半、加賀までは３時間で来られるようになる。関東圏からの誘客を図るために、市としても旅行会社と提携して旅行商品の開発などの取組をしていかなければならないと考えている。

Ｑ：山代温泉や片山津温泉の総湯などの建物は、著名な建築家が手がけているが、何かしらのつながりがあったのか。

Ａ：１人は、山代温泉の旅館組合の理事長との関係で、山代の再生プロジェクトという、地域のまちづくりの委員会をつくったときに、自ら無償でアドバイザーとして参加された。もう１人は出身が金沢である。

Ｑ：金沢の２１世紀美術館も著名な建築家の妹島和世さんと西沢立衛氏の作品であるが、美術品を見に来るというよりも、美術館の建築そのものを見るために、わざわざ海外からも旅行者が訪れている。

Ａ：確かにそういうこともある。著名な建築家に手がけてもらった市内の中学校でも建築家の視察がある。山代はまちの統一感を持たせるために、昔の街並みを凝縮したような一角をつくったが、そのデザインの監修もしていただいた。

Ｑ：これだけのものをつくるということは、土地の買収なども含め、かなりの額になると思うが、財源として特別交付金等が出ているのか。

Ａ：国土交通省のまちづくり交付金事業と、併せて合併特例債を使った。

Ｑ：震災の影響があったのか、外国人の観光客が少ないのではないかという印象があるが、レディ加賀」だとか、あるいは建築の面でも非常に力を入れているようなので、今後、そういう面で外国人の誘客に取り組んでいかれるのか。

Ａ：パンフレットや案内板、マップ等は３ヶ国語のものを作っているが、外国人の誘客のための宣伝活動等は市としては特に行っていない。県には、小松空港の利用促進・誘客のための委員会があり、その一員としては参加しているが、インバウンド対策としてはまだまだこれからである。外国語を話せないし、対応ができないということで、外国人お断りという旅館もまだ一部にあるので、誘客の売り込みをする前に、受け入れ体制づくりが必要である。まち中で外国人に道を聞かれても案内ができないということもあるので、地域としてもう少しその辺の体制が取れればと思っているが、遅れているのが現状である。

以上

４　添付資料等

原本添付省略

調査概要　【金沢市】

1　市の概要

金沢市は、石川県のほぼ中央に位置し、東は富山県境から西は日本海まで東西２３．３キロメートル、南は白山山麓から北の河北潟まで南北３７．３キロメートルの範囲にある。

市街地は、二大清流の犀川、浅野川に挟まれた地域にあり、自然環境に恵まれた、面積４６７．７７平方キローメートル、人口約４６万２千人を擁する北陸の中枢都市である。

金沢の町の起こりは、一向宗徒の勢力が強まり、今の金沢城址の地に寺坊を建立し、寺のまわりに、後町、南町などの町がつくられたのがはじまりと言われている。天正 11 年、前田利家が金沢城に入城し、以来、加賀、能登、越中を合わせた加賀百万石の城下町として繁栄を続けた。

明治４年の廃藩後、金沢町となり、同２２年に市制が施行され、県庁所在地として行政、文化、経済の中心として発展を続け、大正１３年以来、数次にわたる隣接町村の合併により市街地規模の拡張を図り、今日に至っている。

金沢市は、平成２１年に「歴史都市」として第 1 号認定を受け、また、同年に世界で初めて、クラフトの分野でユネスコの創造都市として登録されるなど、歴史、文化、産業が連環し、「小さくても世界の中で独特の輝きを放つ世界都市 金沢」の形成を進めている。

（参考／金沢市市勢要覧ほか）

2　調査事項

「産業振興施策」及び「観光振興施策」について

金沢市は、ものづくりのまちとしての伝統と誇りを継承・発展させることを目的とした「ものづくり基本条例」を制定し、様々なものづくり戦略を進めている。

また、観光戦略として、「きらりと光る金沢のもてなし力の向上」などを掲げ、市民と行政とが一体となって、歩きたくなる環境整備やボランティアガイドによる観光案内など、「もてなし力の向上」に取り組んでいる。

（１）産業振興施策について

ア　ものづくり基本条例

（ア）条例制定の背景

・金沢は、ものづくりの技と心が人々の暮らしの中に溶け込み、伝統工芸、繊維、機械、農業など、多彩な産業を創出してきた。

・生活、文化及び産業が相互に連環し、ものづくりのまちとしての個性をつくり、それが魅力となって、まちの発展を支えてきた。

（イ）条例の目的

ものづくりを大切にするとともに、ものづくりを独創性と多様性に富んだ産業として振興し、新たな価値の創造に挑戦していくことは、豊かで活力ある地域社会を実現する上でとても重要であり、ものづくりのまちとしての伝統と誇りを継承・発展させることにより、市の健全かつ持続的な発展に寄与することを目的として、本条例を制定。（平成２１年４月施行）

（ウ）基本理念

・ものづくりを大切にする

・ものづくりの基本は人づくり

・事業者の自主的な努力を促進する

・地域資源を活用し、環境との調和を図る
・海外との交流、連携等を図る

（エ）基本的な施策
・人づくりの推進（ものづくり教育の推進、ものづくり人材の確保・育成等）
・事業環境の整備等（ものづくり産業の基盤整備、新たな事業の創出支援等）
・付加価値を高めるものづくりの推進（新商品及び新技術の開発支援等）
・戦略的な販路開拓の促進（ブランド力向上の支援、国内外への情報発信等）
・普及啓発等（市民がものづくりにふれあう機会の確保等）

（２）観光振興施策について

ア　金沢の観光の現状と展望

（ア）金沢市の観光の現状

（イ）加賀藩の知恵（戦略的な城下町、平和都市・文化都市）

（ウ）まちづくりの基本概念（ハード）
・保存と開発の調和
（伝統的建造物保存条例、用水保存条例、寺社風景保存条例、夜間景観形成条例等）
→世界からの評価
・金沢２１世紀美術館…プリツカー賞（建築会のノーベル賞）受賞
・金沢海みらい図書館…世界で最も美しい公共図書館ベスト２５
・金沢駅　もてなしドーム…世界で最も美しい駅１４駅に選出
・兼六園…欧州からの旅行者に人気の日本の観光地　第１位

（エ）まちづくりの基本概念（ソフト）
・継承と創造の調和
（人間国宝、伝統文化・工芸、ユネスコ・クラフト創造都市、新しい文化の創造）

（オ）金沢のもう一つの魅力（食）

（カ）金沢の観光の展望
・新幹線金沢開業を生かした観光誘客
（プロモーション活動の強化、受け入れ体制の整備、クラフトツーリズム）
・ＭＩＣＥ誘致の推進
※ＭＩＣＥ＝Meeting（会合・大会）、Incentive（誘引・動機）、Convention（会議・見本市）、Exhibition（展示会・博覧会）の頭文字をとった造語
・教育旅行の誘致の推進（修学旅行、ゼミ旅行、合宿等）
・もてなし力向上の取組（もてなし力向上フォーラム、もてなし力向上支援事業等）

３　主な質疑応答等

（１）ものづくり基本条例・ものづくり戦略

Ｑ：ものづくり産業支援課から、伝統工芸の部分をクラフト政策推進課として、組織を別にした理由は何か。

Ａ：もともとは一緒の課だった。最初はものづくり政策課という名称であったが、ものづくりは、もう政策を立案する段階ではなく実行の段階であるということで、ものづくり産業支援課に名称が変わった。平成２１年に、金沢市がクラフト分野でのユネスコの創造都市ネットワークに入り、これからは「文化のビジネス化」の政策を推進していかなくてはいけないということで、このネットワークの強みを活かしながら、「文化のビジネス化」に特化して進めていこうということで、クラフト政策推進課として組織を分けた。

Ｑ：組織を分けたということは大変大事な視点かと思うが、分けたことによる成果はどうなのか。
Ａ：一緒の課のときはその良さがあった。伝統工芸と他の分野、例えば機械工業、食品関係などを一緒に扱っていたので、広く浅くという点では、以前の組織のほうが分かりやすかったが、伝統工芸を分けたことによって一つに特化してより深くなった。「文化のビジネス化」に重点的に取り組むということで分けたが、一長一短はある。ただ、同じフロアーの隣同士にあるので、特に問題はない。
Ｑ：職人大学校という制度があるが、これはどんな形で運営されているのか。
Ａ：ものづくり基本条例の中で、人づくりの推進の施策に入っているが、これは別な組織を作って運営している。
Ｑ：将来を見据えた人材育成機関ということか。
Ａ：もともと業に就いている方が、更に技を磨くという場所である。
Ｑ：いろいろな業種の方たちが集まって意見交換を行うとか、そういうものなのか。
Ａ：瓦屋だとか畳屋だとか、そういう「屋」の付く仕事の方たちで、一定程度経験のある方を業界団体から推薦してもらい、何年間か継続的に実技指導をして、後世につないでいくというようなことを行っている。
Ｑ：具体的に、例えば月に１回とか、半年に１回とか、どのようなペースで行っているのか。また、会場はどこで行っているのか。
Ａ：職人大学校という建物があり、実習室等が備わっている。週１回とかのペースで実技指導をしている。例えば、畳をつくったり、宮大工というスキルの講義では、ミニチュアの瓦を積んでみたりとかの実習をしている。
Ｑ：職人大学校に対して、市から助成等は行っていないのか。
Ａ：職人大学校は公益法人になっている。運営費等については市から出している。
Ｑ：ニッチトップ企業の認定というのが３月にあったが、認定されたのは従業員４～５人の中小零細企業が多い。どうやって認定しているのか。
Ａ：認定しているのは県である。この前も金沢の会社が選ばれた。
Ｑ：金沢はいつも２～３社入っている。金沢市が推薦したのか。
Ａ：県から市町村に推薦するところがないかという話があったり、県には産業支援をしている機関があるので、そういうところから探したりしているようだ。公に市から推薦をするという制度ではない。
Ｑ：金沢というと、観光、文化、歴史的なまちであるが、ものづくりと観光が経済的にどう結び付いているのか。
Ａ：いわゆる製造業は、購買層が一般市民ではないという業種が多い。一方、食品などはそうではないので、観光キャンペーンなどに協力してもらったりしている。また、「クラフトツーリズム」という形で、金沢に来ていただいた方に工芸の体験教室を行うなど、伝統工芸の分野はわりと観光には向いている。
　最近、夜景のきれいな工場を見に行くことが人気になっているという話をよく聞くので、一度、企業に「見学はできますか」というようなアンケートをとったことがあるが、「危ない」とか「従業員が４人しかいないのに３０人の団体は受け入れられない」とか、そういう内容だった。皆さんに開かれたものづくりの場所となるために、見学通路をつくるなど、工場改良に対する助成制度もあるが、金沢市の製造業はほとんどが従業員３０人以下なので、なかなか難しいところである。
Ｑ：市の中で産業と観光の担当課が別れているが、その辺を結び付ける戦略は何か考えている

か。例えば、墨田区は３M運動といって、ほんの２～３人でやっているようなところでも「小さな博物館」をやっている。そこで製造をしながら、製品がどういうふうにできているのかという歴史を学べるということで、以前から一つの観光コースとなっている。金沢は、観光のまちで、人も大勢訪れて、しかもまちを周遊するというのが特徴だと思う。墨田区はなかなか周遊ということにはなっていないが、金沢は歴史的に回遊性があるまちなので、その辺で、ものづくりと観光がどうジョイントしているのかということに大変興味を持っている。

Ａ：後ほど、観光担当からも話があると思うが、産業面で言えば、金沢のものづくりの会社は、ほとんどが市の周辺部にある。金沢は、観光で歩いて回ると大変いいまちだと皆さんに言っていただいているが、工場を見るにはタクシーで１時間ぐらいかかってしまうので、なかなか観光として簡単には行けないのが現実である。

Ｑ：①生活に関わる伝統工芸の業種というのは、どういうものがあるのか。②「金沢ブランド」の一つに加賀野菜とあるが、どのようなものがあるのか。墨田区でも「寺島なす」というものがあり、東京野菜の一つとして売り出そうとしている。③ものづくり戦略のパンフレットの表紙にある、グッドデザイン賞を受賞した「サミッター」という部品は何に使われるものなのか。

Ａ：①生活に関わる伝統工芸とは、大きな伝統工芸の中の一分野ではなく、金沢でいう伝統工芸のことである。金沢でいう伝統工芸には、国指定のものが６種類、加賀友禅、九谷焼、金沢漆器、金沢仏壇、加賀縫いなど、それと希少伝統といわれるものが２０種類ある。それらが全て金沢市の伝統工芸産業であり、観賞用ではなく生活用として使われてきて発展してきたものである。②加賀野菜は、サツマイモ、加賀太きゅうり、金時草、くわいなどがある。加賀野菜として認定されるのには、例えば何年間金沢でつくられているとか、いくつか条件があり、金沢市農産物ブランド協会で認証している。③サミッターは、機械の部品の一部で、工作機械の部品をつくっている会社の製品である。この製品は、グッドデザイン賞を受賞した後、ドイツのデザイン賞も３つ受賞している。

（２）観光振興施策

＜時間の関係で質疑省略＞

以上

４　添付資料等

原本添付省略

調査概要　【富山市】

1　市の概要

富山市は富山県の中央部に展開する富山平野の中心に位置し、神通川の清流に沿って市街地を形成している。北は富山湾に臨み、南は３千メートル級の山々を背にした、面積１，２４１．８５平方キロメートル、人口約４２万２千人の日本海側有数の中核都市である。

江戸時代に富山藩十万石が置かれ、薬業や和紙などの産業が奨励され、「くすりのとやま」として全国に知られるようになった。

明治以降、県庁所在地として、また北陸初の水力発電所が建設されるなど、豊かな電力を基盤とした工業のまちとして順調な発展を遂げ、戦後、都市基盤の整備や産業経済の進展により、現在では日本海側有数の商工業都市として発展してきた。

平成８年には旧富山市が中核市に移行し、平成１７年には、７市町村が合併し、新しい「富山市」が誕生した。

全国初となる本格的なＬＲＴ（次世代型路面電車）富山ライトレールなどの公共交通を核としてコンパクトシティを目指す戦略的な提案が評価され、平成２３年に、国から「環境未来都市」として選定された。

（参考／富山市勢要覧ほか）

2　調査事項

「まちづくり施策」について

富山市は、公共交通機関沿線に都市機能を集積させ、拠点集中型のコンパクトなまちづくりを目指す「コンパクトシティ構想」を掲げて、各種都市整備施策を進めている。また、市内を流れる運河において「船の運航による魅力づくり」や水辺を活かした魅力あるまちづくりを推進している。

（１）コンパクトなまちづくり

ア　富山市の概況と都市の特性

・人口減少と高齢化

・中心市街地の空洞化による活力低下と魅力喪失

イ　コンパクトなまちづくりの基本方針

・公共交通沿線に居住、商業、業務、文化等の都市の諸機能を集積

ウ　公共交通の活性化

・ＬＲＴ（軽量軌道交通）ネットワークの形成

エ　公共交通沿線地区への居住促進

オ　中心市街地の活性化

・賑わい拠点の創出

・中心商店街魅力創出事業

カ　自転車市民共同利用システム導入事業

キ　魅力あるまちづくり（都市景観の向上）

・街路景観を演出するハンギングバスケット、バナーフラッグ等の設置

（２）水辺空間の賑わい創出

ア　富岩運河の保存と再生整備

・遊歩道の整備、桜の名所づくり

・富岩運河環水公園の整備

イ　富岩水上ライン

全長約５．１キロメートルの富岩運河において、県との共同により、環境にやさしい日本で初めての「ソーラー船」及び国内に数隻しかない「電気ボート」の運航。

・土曜、日曜、祝日の定期運航

・お花見等のイベントに合わせた運航

・貸切運航

３　主な質疑応答等

Ｑ：市内のバスとライトレール・セントラムの運賃はそれぞれいくらか。

Ａ：セントラムは１回２００円、高齢者は１００円である。バスは定額制ではなく距離に応じた運賃になっている。郊外から来ると、１番高いところだと１０００円以上かかってしまう。これは民間バスなので、なかなか料金コントロールがしにくい。そのため、高齢者に対しては、全て１００円で利用できる「お出かけ定期券」というものを発行している。

Ｑ：セントラムは１日乗車券はあるのか。

Ａ：１日乗車券はないが、１日の乗り降りが４回目からは無料というチケットを販売している。

Ｑ：自転車市民共同利用システム・アヴィレについて、２年間で登録者数が１６００人ということだが、想定と比べてどうなのか。

Ａ：正直言うと少ない。まだまだ利用していただくことが必要かと思っている。当初は、インターネットだけで登録者を募集していたが、観光客だとか、ちょっとだけ使いたいという方には不便な方法であったため、ホテル等に１日券・２日券を置いてもらい、徐々に利用者は増えつつある。民間事業者による事業ではあるが、まち中の回遊性向上のシステムの一つであるので、何とかもう少し宣伝をして、利便性を向上させたい。

Ｑ：観光客の需要はまだ少ないということか。

Ａ：少ない。例えば、先日ある学会が市内であったが、その学会とタイアップして、学会に来た人に１日券を配布して、まち中を散策するために使っていただくという取組も行った。そういったイベントとからめて利用頻度を高めるという仕組みも、事業者としては考えている。

Ｑ：事業者も経費的にはかなりかかっているのか。

Ａ：金額的にはっきりしたことは分からないが、自転車や設置ブースなどいろいろあるので、なかなかすぐに設置というわけにはいかないのではないか。

Ｑ：あくまでも、民間事業者がつくったものなのだが、富山市としてはどうなのか。

Ａ：市としては、今のところ、セントラムと一体となって自転車も使っていただくということを想定しているが、もう少し採算ベースに乗れば、例えば郊外に伸ばすとか、そういったことも検討してはどうかと思っている。

Ｑ：この自転車市民共同利用システムの事業者であるシクロシティという会社はフランスの会社であるが、どうしてここが入ってきたのか。

Ａ：実は、富山市長が路面電車の視察でフランスに行った際に、このシステムを見て、これはいいと、日本で一番最初に富山市に導入してほしいと協力にプッシュして実現した。なかなか採算の面で難しいところがあったみたいだが、市長の熱意で相手も折れたのではないか。

Ｑ：富岩運河で運航しているソーラー船の「ｓｏｒａ」と電気ボートの「もみじ」は、大体いくらくらいするものなのか。

Ａ：「ｓｏｒａ」は県がつくったものであるが、何もないところからつくったので６０００万円くらいかかったと聞いている。国のみなと振興交付金を使ったので、１／２は国からの交付

金を充てている。この運航は、社会実験という位置付けなので、運行費については国から１／２の補助が出ている。「もみじ」については、アメリカ製の既製品で、日本までの運搬費用等全て含めて１３００万円程度である。「もみじ」は、１０人しか乗れないので、なかなか観光という面では厳しいところである。

Ｑ：船はそれぞれ何艘保有しているのか。

Ａ：それぞれ１艘ずつである。

Ｑ：年間の運営費は、県と市で折半ということだが、市の負担はどれくらいか。

Ａ：もろもろの経費がかかるが、運航費だけで言えば年間１５００～１６００万円程度である。その内、１０００万円程度の運賃収入があるので、その残りの部分を県と市が折半で負担している。そのほか、維持管理については、バッテリー代等がかかるが、各々で行うこととしている。

Ｑ：船が１艘ずつしかないので、観光に使うのはなかなか難しいと思うが、パンフレットを見ると土日、祝日しか運航していない。ソーラー船とか電気ボートという売りはあるのかもしれないが、そういうものではなくとも既存の船などでもいいが、これをもう少し増やすという計画はあるのか。

Ａ：今のところは増やす計画はない。その辺が課題だと思っているが、現在は、電気で環境にやさしいということを前面に押し出している。経費等の問題もあるので、その辺は、社会実験ということで、いろいろなパターンを計算して行っているところである。

Ｑ：これから新幹線も開通するので、その辺を考えると少しもったいない気がする。

Ａ：県のほうでは、かなりこれに力が入っているようだ。

Ｑ：どちらかというと県の主導で行っている事業なのか。

Ａ：県と市で事業を行っているが、もともとの発想は富山市長である。この辺りは川とかが多いので、その水辺を何とか賑わい創出につなげたいということで、ボートがあればいいのではないか、ということを考えた。しかし、普通の川だといろいろと技術的な面で難しいので、運河であれば流れもないし、水深も一定なのでやりやすいだろうということで運河で行うこととした。その際に、県も一緒にやらせてほしいということで、県と一緒に行うことにしたという経緯がある。今のところは社会実験という位置付けで需要を見極めているところである。

以上

４　添付資料等

原本添付省略